

県立高等学校教育課程課題研究（国語）

－新学習指導要領における各科目の特性を踏まえた指導の在り方について－

令和4年度から実施される新学習指導要領において、国語科では全ての科目が新設されるとともに、各科目・領域で育成すべき資質・能力がより一層明確に示されることとなった。そこで、本研究では、共通必修科目の「現代の国語」と「言語文化」との比較研究に加え、共通必修科目「言語文化」と選択科目「文学国語」との比較研究を行うことを通して、科目の特性を的確に踏まえた国語科指導や学習評価の在り方について明らかにするとともに、各学校の実情に合わせて活用できる授業実践例を示した。

＜検索用キーワード＞ 高等学校国語科 新学習指導要領 現代の国語 言語文化 文学国語

運営委員長

県立名古屋西高等学校校長 小塩 卓哉(令和元年度)

運営副委員長

県立守山高等学校教頭 加藤 伸夫(令和元年度)

運営委員

高等学校教育課主査 伊藤 君江(令和元年度)

高等学校教育課指導主事 加藤眞太郎(令和元年度)

総合教育センター研究指導主事 戸松 孝至(令和元年度主務者)

研究員

県立春日井西高等学校教諭 亀田 篤(令和元年度)

県立日進西高等学校教諭 松浦 由佳(令和元年度)

県立古知野高等学校教諭 岩本 理恵(令和元年度)

県立岩倉総合高等学校教諭 瀬瀬 由起(令和元年度)

県立豊田南高等学校教諭 三浦千加子(令和元年度)

県立加茂丘高等学校教諭 小辻 輝明(令和元年度)

県立岡崎西高等学校教諭 有馬 彰吾(令和元年度)

県立幸田高等学校教諭 長谷川雄三(令和元年度)

県立刈谷高等学校教諭 森山 怜子(令和元年度)

県立安城高等学校教諭 土屋 豊樹(令和元年度)

県立時習館高等学校教諭 大河 靖知(令和元年度)

県立国府高等学校教諭 杉山 有希(令和元年度)

1 はじめに

昨年度より「県立高等学校教育課程課題研究」は、高等学校教育課と総合教育センターとの共催事業となり、総合教育センターの教育研究調査事業として実施している。総合教育センターで実施され

てきた「教科指導の充実に関する研究」と合流したことで、従来6名であったセンターの研究者も12名に倍増となり、より深く具体的な研究が可能となったと言える。

今年度は、新学習指導要領に向けて、新たに必修科目となる「現代の国語」及び「言語文化」の二科目について、その設置の意義、目標、内容等を踏まえ、単元計画や教材を作成して、効果的な指導の在り方についての研究を行った。さらには、昨年度行った「文学国語」に関する研究も継続しつつ、新学習指導要領における国語科の科目構成を正しく理解し、明確化された学習過程に則した指導の手だてを具体的に提案することをねらいとして研究を行った。また、観点別学習状況の評価に関しては、現行の4観点が「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点到整理されたことを踏まえ、従来の評価の在り方からどのような点を変更すべきかについて論議を重ねた。新たな評価の観点に基づく具体的な授業実践を経て、何度も研究協議を行い、研究成果につなげた。

評価については、平成30年7月に告示された「高等学校学習指導要領解説 国語編」には具体的な記述がまだなく、令和元年の7月に行われた全国高等学校国語科主事会で提供された資料や国立教育政策研究所教育課程研究センターの発行する「学習評価の在り方ハンドブック」等を参考にし、3観点到基づいた評価方法の在り方を研究した。

2 研究の目的

新学習指導要領改訂は、国語科においては非常に大きな変更であることから、科目構成、内容、言語活動例等、学習指導要領のねらいとするところを、正確に把握することが第一の目的である。また、県立高等学校教育課程課題研究会では単元案の充実を従来から大切にしてきた伝統を踏まえ、主体的・対話的で深い学びの視点を取り入れた指導方法の単元化にも留意をした。さらには、授業指導案に加えてパフォーマンス課題、評価用ルーブリック、ポートフォリオの作成例も提案できるよう心掛けた。

3 研究の方法

(1) A、Bの2グループに分け、Aグループは、「現代の国語」班と「言語文化」A班、Bグループは、「言語文化」B班と「文学国語」班とし、グループ別協議、班別協議及び授業実践を通じて、指導計画の検討・授業実践の評価・改善案の作成を行うとともに、それぞれの科目の特色が明らかになるように努めた。

(2) 各班の提案する授業実践事例は、学習指導案を基に実際に授業を行い、その反省を踏まえて改善案を盛り込むことで充実を図った。

4 研究の内容

(1) 「現代の国語」授業実践 <論拠を使って議論しよう>

「現代の国語」は、その目標に「実社会に必要な国語の知識や技能の習得」とあるように、社会において実用的な知識・技能の習得を目指すものである。これは、文化への理解や表現を味わうことを主とする「言語文化」とは、大きく異なっている。また、「話すこと・聞くこと」の指導が重視されている点も、「言語文化」との相違点である。以上のことから、今回は「話すこと・聞くこと」に関わる資質・能力の育成を目指して授業を行った。授業は次の三つの場面で展開した。

①俳句の季語に関する教材文を読み、「話題」「主張」「根拠」の3観点で整理させ、②「論拠」を意識して議論のための主張を整理させ、③以上の材料を活用してグループ同士で議論をさせた。これらの中でも特に、②③の論拠についての理解と活用を授業の焦点とした。

実践を通して、論拠を意識した話し合いの授業では、話し合いの記録とその後の再現の一致具合を見ることで、評価が可能であると分かった。また、根拠と論拠を混同する生徒が多かったので、論拠について扱う際は、両者の定義を徹底することが成功のカギである。

(2) 「言語文化」A班 授業実践 〈季語をつくる〉

「言語文化」が重点を置く「読むこと」の領域において実践を行った。「現代の国語」と同じく、俳句の季語に関する教材文を使い、「言語文化」が「現代の国語」とは異なり、どのような資質・能力の育成を目指す科目であるのかについて研究した。言語活動として、実際に季語をつくることで言葉に対する理解を深め、ものの見方、感じ方、考え方を深めることを目標とした。

「主体的・対話的で深い学び」とするために、個人活動とグループ活動を交互に行いながら、季語を自作したり五感を使って季語を分析したりする学習を行った。それにより、今までとは異なる角度から言葉について考え、新たな見方を学ぶことができた。

実践を通して、「言語文化」の言語活動とは、生徒に今備わっている言語の力について改めて考え直す機会をもたせる活動であり、ふだんなじみのない言葉にも一旦立ち止まって成り立ちや奥行きを考え、それらを自らの内と外にある文化に結び付けていけるような活動ではないかと考えた。また「主体的に学習に取り組む態度」の評価について、振り返りシートを用いた評価を試み、その結果と課題を明らかにした。

(3) 「言語文化」B班 授業実践 〈俳句に親しもう〉

(3)及び(4)は「言語文化」と「文学国語」との比較を通して、共通必修科目と選択科目のそれぞれにおいて育成する資質・能力の違いや、学習指導の在り方の違いについて明らかにしようとする実践研究である。

「言語文化」は社会人として生活するために必要な国語の資質・能力の基礎を身に付けさせることを目的としている。「言語文化」B班では、「言語文化」の「書くこと」に焦点を当て、生徒自身の体験を基にして俳句をつくらせるという活動を行った。松尾芭蕉の『笈の小文』（『あいち文学散歩』所収）を読ませ、俳句の背景、俳句に込められた感情などを解説した上で、ワークシートを用いて俳句作成させた。前半の俳句作成までが「言語文化」の範囲に当たる。この部分では、自身の体験とそのときの感情、その感情に合う季語を探させ、俳句作成の試行錯誤をする途中過程を残すように、消しゴムの使用を禁止した。その後の五七五の俳句に七七を付け加える部分は、他者の作品を読んで書く活動で、「文学国語」で扱うこともできる発展的な内容である。ここでは他者の感情を受け取り、自分の中で再構築する必要があるため、生徒の多くがより難しさを感じていた。本研究を通して、「書くこと」は知識及び技能の内容である「言葉の特徴や使い方に関する事項」にも強く影響を与えていることが分かった。

(4) 「文学国語」授業実践 〈描写を工夫して小説を書こう〉

「文学国語」と「言語文化」とはどのように異なるのかという問いを出発点とし、「書くこと」の単元の実践を通して、「文学国語」によって育成する資質・能力を具体的に確認する実践研究を行った。

「書くこと」の指導事項は、「言語文化」では自己の体験に根ざした表現であるのに対し、「文学

国語」は読み手を意識した「独創的」な文章の創作という発展的な内容である。そこで本実践では、郷土教材である諏訪哲史「市民薄暮」の作品構造を参考に、〈「わたし」が時空を超えて「ある人」と出会い、その意外な一面を知る〉物語を創作させた。その中で、課題を地の文に絞り、情景描写・行動描写を工夫させた。また、「主体的・対話的で深い学び」とするために、①登場人物「ある人」を選定・取材し創作意欲を高めること、②グループカンファレンスを行い協働で表現を工夫すること、③個別目標を設定し自己の学習を調整することの3点を工夫した。「1回書いてみると、作者がどんな気持ちを込めて書いているか、分かった」という感想には、創作による書き手の視点の獲得がうかがえる。創作体験によって文学的表現の必然性に気付くことは、「読むこと」の学びを深め、「文学国語」の目指す「感性・情緒」の育成につながると考える。

5 研究のまとめと今後の課題

今回の研究では、新学習指導要領国語科の「現代の国語」「言語文化」及び「文学国語」について、取り扱う文章を具体的に示した上で、領域等を絞って実践例を提案した。計4班の研究は、科目ごとの目標や内容の違いにも留意して実践が組み立ててあるので、班ごとの取組を比較することで科目の特性を見極めることが可能である。今後他の新科目についても実践を積み重ねていく必要があるが、その際、新科目が設置された正確な趣旨を把握し、新たな観点別学習評価の方法を、今後国から出される方針をよく理解した上で更に検証していかなければならない。

6 おわりに

教科・科目のねらいを踏まえた、生徒の資質・能力を確実に育成するための学習指導の在り方や、その成果を的確に測り、指導及び学習の改善に生かすことのできる学習評価の方法など、新学習指導要領の本格実施に向けて解消すべき課題は多い。そのような中で、本研究が今後の学校現場における授業改善に向けた取組のための足がかりとなることを期待したい。

<授業実践1>「論拠を使って議論しよう」（現代の国語 第2学年 2学期）

1 実践にいたる背景

「現代の国語」は、その目標に「実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする」とあるように、社会において実用的な知識や技能の習得を目指すものである。これは、文化への理解や表現を味わうことを主とする「言語文化」とは、大きく異なっている。

また、「話すこと・聞くこと」の配当時間が多く、重視されている点も「言語文化」との相違点である。しかしながら、「話すこと・聞くこと」は「読むこと」「書くこと」に比べ、実践や評価の方法が分かりにくいという課題もある。

以上のことから、今回は「話すこと・聞くこと」の技能を習得するための授業を実践した。具体的には、①「話すこと・聞くこと」の枠組みとして、「話題」「主張」「根拠」の3観点を理解する、②第4の観点である「論拠」を理解する、③①②を基に、自身の主張の構築及び議論ができるようにするという流れで、単元を進める。特に②③の論拠についての理解と活用を授業の焦点とする。

＊「論拠」とは・・・「トウルミンの議論モデル」における、根拠（事実）と主張をつなげる要素。各人の価値観、信条などがそれに当たる。例えば「昨日カレーを食べたから」という根拠から「今日はカレー以外を食べよう」という主張が導かれるのは、「同じものを連続で食べるべきではない」という論拠が根拠と主張をつなげているためである。したがって、議論の中でお互いの主張を正確に理解するためには、根拠だけでなく、論拠も共有する必要がある。また、論拠の違いは主張の違いに直結するため、グループ内で一つの結論を出そうとする場合、先に論拠を統一しておく必要がある（『議論のレッスン』福沢一吉 NHK 出版 2002）。

2 指導目標

(1) 単元の目標

- ・主張と論拠など情報と情報との関係について理解すること。（〔知識及び技能〕(2)ア）
- ・論点を共有し、考えを広げたり深めたりしながら、話し合いの目的、種類、状況に応じて、表現や進行など話し合いの仕方や結論の出し方を工夫すること。（〔思考力、判断力、表現力等〕A話すこと・聞くこと(1)オ）

(2) 言語活動

ア 言語活動

論拠を使った議論

イ 言語活動のねらい

お互いの論拠を明確にしながら、グループ内の論拠を統一し、そこからグループとしての結論を導く過程を実際の議論の中で体験する。

(3) 教材

ア 教材 「季節の言葉と出会う」黛まどか（『新編国語総合』大修館書店）

イ 教材観

- ・「論拠」を説明するための教材として扱い、内容に深く踏み込むことはしない。
- ・話題・主張・根拠・論拠が明確であるため、要旨の整理の練習がしやすく、論拠も説明しやすい。

(4) 主体的・対話的で深い学びの工夫

- ・自分の意見を主張する。（主体的）
- ・実際の議論の中で、議論の方法を学ぶ。（対話的）
- ・「論拠」というふだん意識されない要素を知ったことをきっかけに、論理的な議論をするための他の要素（反証・裏付け・限定など）への関心をもつ。（深い学び）

3 評価

(1) 単元の具体的な評価規準

知識・技能	思考・判断・表現 (話す・聞く能力)	主体的に学習に取り組む態度
主張と論拠など情報と情報との関係について理解している。	論点を共有し、考えを広げたり深めたりしながら、話し合いの目的、種類、状況に応じて、表現や進行など話し合いの仕方や結論の出し方を工夫している。	論拠の概念を理解し、議論の中で使いこなせるように粘り強く努力している。

(2) 評価方法

ア 知識及び技能

ワークシートB，定期考査

イ 思考力，判断力，表現力等（話す・聞く能力）

議論終了時の振り返り（ワークシートC・D）

＊ワークシートDで，自身とグループの主張・論拠を再現させる。それがグループの議論の記録（ワークシートC）と一致しているかを確認する。また「根拠」「論拠」「主張」をつなげて説明させ，それぞれのつながりを理解して議論していたかを確認する。

	評価A	評価B	評価C
グループ内で論拠を共有・統一し，それに基づいて，根拠からグループの主張を導くことができる。	自身とグループの論拠と主張を再現でき，根拠・論拠・主張のつながりを説明できる。	自身とグループの論拠と主張を再現できる。	自身とグループの論拠と主張のうち幾つかは再現できる。

ウ 主体的に学習に取り組む態度 毎時間の振り返り（感想文）

	評価A	評価B	評価C
論拠を理解し，使いこなせるようになるために，努力しようという意志がある。	論拠について自身の達成度を把握し，その上で今後どうしていきたいか考えている。	論拠について自身の達成度を把握できている。	自身の達成度を把握しようとしている。

4 単元の指導計画（配当4時間）

次／時間	学習活動	言語活動における指導上の留意点	◇評価規準 ◆評価方法 ＊努力を要する状況と評価した生徒への支援の手だて
第1次 (2時間)	①「季節の言葉と出会う」の内容を「話題」「主張」「根拠」の3観点で整理する（ワークシートA）。 ②①を使い，「論拠」について説明する。	①3観点及び論拠を理解させることが授業の目的なので，本文の内容説明は，最低限に抑える。 ②内容説明が不十分でも情報の整理ができるように，ワークシートにヒントを書いておく。	◇知識及び技能 ◆定期考査 ＊机間指導，添削

次／時間	学習活動	言語活動における指導上の留意点	◇評価規準 ◆評価方法 *努力を要する状況と評価した生徒への支援の手だて
第2次 (1時間)	①「〇〇高校のスマートフォン使用のルールについて」という話題で、論拠と主張を考えて、各自まとめる(ワークシートB)。	①これを使い、次回、議論をすることを説明する。	◇思考力、判断力、表現力等 ◆ワークシートB *机間指導、添削
第3次 (1時間)	①議論の趣旨について再度確認する。 ②グループに分かれ、議論を行う(ワークシートC)。 ③議論終了後、振り返りを行う(ワークシートD)。	①「主張の論拠を明確にすること」と「グループ内で論拠を統一すること」が重要であることを説明する。 ②グループはワークシートBを参考に、論拠や主張の異なる者で編成する。	◇主体的に学習に取り組む態度 ◆ワークシートC ワークシートD *机間指導

5 学習活動の実際

今回は「話すこと・聞くこと」授業として、論拠の理解と議論における実践を行い、授業の目標は達成できたと考える。論拠の理解については、生徒全員が自身の論拠を適切に構築できていた。また、論拠を使った議論については、A評価とB評価の割合が半分ずつという結果であり、全員が論拠を意識した議論を行えたと考えてよいだろう。

6 研究の成果と課題

(1) 「現代の国語」について

現代の国語において文章教材は、特定の知識や技能を習得するための“例文”になる。したがって、本文の内容よりも、扱いやすさ(論理の明快さ、適度な長さなど)の方が重要になる。

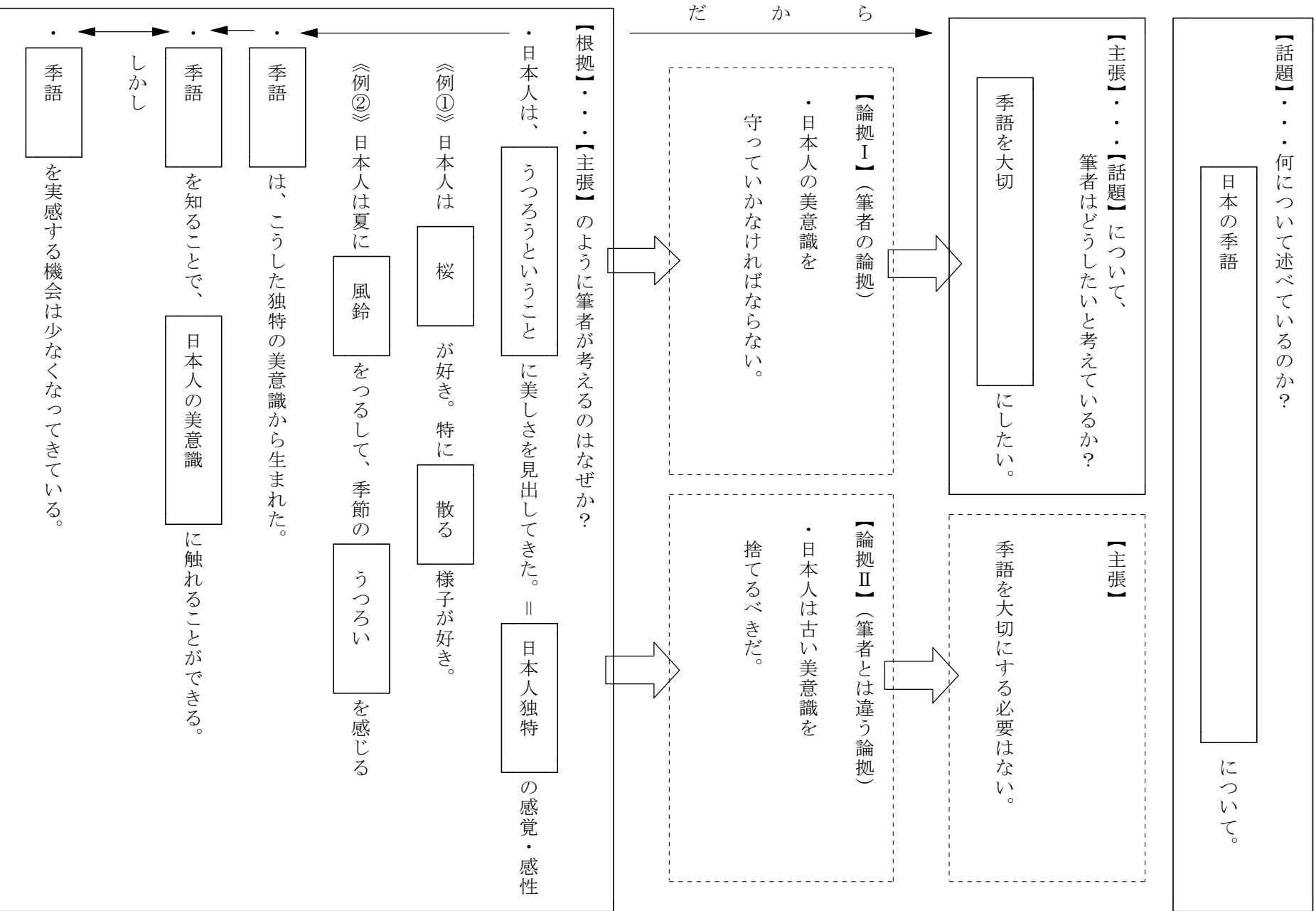
(2) 「話すこと・聞くこと」の評価について

特定の枠組み(今回の授業では「論拠の統一」)を使った「話すこと・聞くこと」の活動は、話合いの記録とその後の再現の一致を見ることで評価可能である。また、より高度な事柄を評価する場合には、話合いの中での論理の流れも再現させるとよい。

(3) 「論拠」について

一部、「論拠」と「根拠」を混同してしまう生徒もいた。原因として、「論拠」に比べ、「根拠」の定義をあまり徹底していなかったことや、そもそも「論拠」という言葉自体が分かりにくかったことが考えられる。専門用語にこだわらず、初めから、「論拠→価値観・信条」「根拠→事実」というふうに言い換えておくとうい。

*本文の内容を、「話題」「主張」「根拠」の3つに整理してみよう。



議論に向けて、自分の意見を整理しよう

【話題】○○高校のスマートフォン使用のルールは適当か？

【主張】だから、幸田高校のスマートフォン使用のルールは、①適当だ。

②不適当だ。

③どちらともいえない。

【論拠】・・・その人の価値観・信条（～べきだ、～が大切だ、～はずだ）

価値観・信条

～があるべきだ

理由

裏付け

※書けたらよい

・・・スマートフォンについて、大切だと思うことは？（複数可）

・すぐに電話に出られるようにするべきだ。

・家族からの急な連絡はすぐに受け取りたいから。

・祖父の死に目に立ち会えなかったから。

・わからないものはすぐに調べたい。

・家で調べることを忘れてしまつたときにその場で早く調べられるから。

・家で調べる課題をやり忘れたら、時間をかけてしまうことがある。

【根拠】・・・共有する事実

幸田高校のルール・・・高校の敷地内では、電源を切り、使用してはならない。

*自己評価

評価内容	A評価	B評価	C評価
論拠を理解し、適切に使うこと。	論拠となる価値観と、その理由を適切に書くことができ、裏付けもすることができた。	論拠となる価値観と、その理由を適切に書くことができた。	論拠となる価値観を適切に書くことができた。

【話題】 ○○ 高校のスマートフォン使用のルールは適当か？

【主張】
① 適当
② 不適当
③ どちらでもない

【主張】
① 適当
② 不適当
③ どちらでもない

【主張】
① 適当
② 不適当
③ どちらでもない

【主張】
① 適当
② 不適当
③ どちらでもない

③ どちらでもない

③ どちらでもない

③ どちらでもない

③ どちらでもない

【論拠】
価値観
ヤフーか、べき

【論拠】
価値観
調べ学習の
時はあり

【論拠】
価値観
勉強に集中
する
友達と会話
するのさ大害

【論拠】
価値観
調べ学習の
時、あり

理由・裏付け
昔ながら
のやり方
大事に連絡以外
に使うことはない
と主張している
人は、時に必要
な時は時に

理由・裏付け
スマホが便利
なため、
手帳よりも
便利に使える
と主張している
人は、時に必要
な時は時に

理由・裏付け
勉強に集中
する
友達と会話
するのさ大害

理由・裏付け
スマホが便利
なため、
手帳よりも
便利に使える
と主張している
人は、時に必要
な時は時に

理由・裏付け
昔ながら
のやり方
大事に連絡以外
に使うことはない
と主張している
人は、時に必要
な時は時に

理由・裏付け
スマホが便利
なため、
手帳よりも
便利に使える
と主張している
人は、時に必要
な時は時に

理由・裏付け
勉強に集中
する
友達と会話
するのさ大害

理由・裏付け
スマホが便利
なため、
手帳よりも
便利に使える
と主張している
人は、時に必要
な時は時に

【根拠】

幸田高校のルール・・・高校の敷地内では、電源を切り、使用してはならない。

【グループで論拠を統一しよう】

*話し合った内容を記録する

① 適当の人（共通して認めること）

・音がでてしまえば、周りに迷惑
が及ぶ（勉強に集中できない）
・友達との会話が減る

② 不適当ではない人

・調べ学習の時は使用すべき
（調べ学習の時は必要とわかった時に
最低で調べたい）

【グループの論拠】

価値観

① スマホが便利に作用
しないべきだ
② 調べ学習の時は使える
ようにすべきだ

理由・裏付け

① 周りに迷惑が及ぶ
から、調べ学習の
時は、調べたい時に
調べたいから。

【グループの主張を決めよう】

*話し合った内容を記録する

調べ学習の時に使いたいけど、その時に
通知音やゲームやラインをしてしまうと
がったり、勉強に集中出来なくなる

【グループの主張】
① 適当
② 不適当
③ どちらでもない

議論の振り返り

A組

【ワークシートD】

【話題】○○高校のスマートフォン使用のルールは適当か？

【自分の主張】

①適当

②不適当

③どちらでもない

【グループの主張】

①適当

②不適当

③どちらでもない

【自分の論拠】

価値観・信条

なるべく使わないほうがいい

理由・裏付け

○調べる

Xゲーム

【グループの論拠】

価値観・信条

学校では使用しない

理由・裏付け

スマホが近くにあると授業に集中できなくなる。

【根拠】

幸田高校のルール・・・高校の敷地内では、電源を切り、使用してはならない。

*グループの【話題】【主張】【論拠】【根拠】をつなげて文章にしよう。

幸田高校のスマートフォン使用のルールは適当かということについて僕は、適当だと思います。理由は、ルールでは、高校の敷地内では、電源を切り、使用してはならないと書いてあり、僕自身も、使用することにより、授業に集中できなくなってしまうと思ったからです。

<授業実践2>「季語をつくる」(言語文化 第1学年 2学期)

1 実践にいたる背景

「現代の国語」の実践と同一の近代以降の文章を取り上げ、「言語文化」が重点を置く「読むこと」の領域において授業づくりの一例を示したい。生徒の言葉に対する見方は、表面的な認識にとどまり、本来的な意味や内容と関連付けて学ぶことができていない。そこで、破格ではあるが、季語をつくることで言葉に対する理解を深め、言葉に対する新たな見方を獲得させたいと考え、本実践を設定した。

2 指導目標

(1) 単元の目標(下線部: 関連する学習指導要領の指導事項)

- ・言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解すること。〔知識及び技能〕(1)ア)
- ・作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。〔思考力、判断力、表現力等〕B読むこと(1)オ)

(2) 言語活動

ア 言語活動

季語をつくる

イ 言語活動のねらい

季語には、伝統的なものの見方や感性が込められている。五感を手がかりに季節の言葉を探しながら、季語をつくる取組によって、季語に内包されている世界の豊かさに触れ、言葉に対する感覚を研ぎ澄まし、新たなものの見方、感じ方を獲得させたい。

(3) 教材

ア 教材 「季節の言葉と出会う」黛まどか(『新編国語総合』大修館書店)

イ 教材観

本教材では、「うつろい」を好み、敏感に感じ取るのは日本人の感性の表れであるとし、季語を知ることによって伝統的な美意識を知り、新しいものの見方ができるようになると述べている。そのため、生徒の言葉に対する感覚を磨き、言葉に対して新たな見方をさせるのに適した教材である。

(4) 主体的・対話的で深い学びの工夫

取り組みたいと思える言語活動にするために、既存の季語を使うのではなく生徒が季節を感じる自作の季語をつくることとした。自分の考えを大切にしながら、グループでの話し合いで新たな気づきを得られるようにし、複数の考えの共通点と相違点を探り、更に展開した問いを考えさせることで、季語づくりで生徒が得た知識を活用し、関連付けながら、考えを発展することができるよう心がけた。

3 評価

(1) 単元の具体的な評価規準

知識・技能	思考・判断・表現(読む能力)	主体的に学習に取り組む態度
言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。	「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもっている。	積極的に、言葉に対して深く考えをめぐらせ、学習課題に沿って、季語をつくり、季語のもつ言葉の奥行について説明しようとしている。

(2) 評価方法

ア 知識・技能

ワークシートの記述によって評価する。

イ 思考・判断・表現（読む能力）

ワークシートの季語と説明文の記述によって評価する。

	評価A	評価B	評価C
自分のものの感じ方，考え方を深め，我が国の言語文化について自分の考えをもつ。	つくった季語や説明文に，個人のものの見方，感じ方が反映されており，伝統的に言葉に内包される世界があるという普遍的な価値観に気付いている。	つくった季語や説明文に，それまでの自己の体験を通した個人のものの見方，感じ方が反映されており，どのような意図でつくったのか説明ができています。	自分なりに季節を意識した季語をつくり，その説明文が書けている。

ウ 主体的に学習に取り組む態度

行動の観察，ワークシートの振り返りや季語，説明文の記述によって評価する。

	評価A	評価B	評価C
ワークシートの振り返りと次の目標によって，取組を改善していく。	粘り強く取り組み，学習を自己調整することができた。	粘り強く取り組むことができた。	自らの学習について振り返りができた。

4 単元の指導計画（配当 6 時間）

次／時間	学習活動	言語活動における指導上の留意点	◇評価規準 ◆評価方法 ＊努力を要する状況と評価した生徒への支援の手だて
第1次（2時間）	①本文を音読する。 ②内容を読解する。	①語句の意味や読みについて確認させる。 ②発問しながら内容をまとめさせる。	◇知識・技能 ◇思考・判断・表現 ◆記述の確認（ノート） ＊発問について，周りの生徒と相談させる。
第2次（4時間）	①季節を感じる言葉をマッピングする。 ②季語をつくり，説明文を付ける。	①各自で記入させた後，グループで取り組ませ，イメージを広げさせる。 ②マッピングを参考に自作した季語とその説明文を書かせる。	◇思考・判断・表現 ◆記述の確認（ワークシート，マッピング） ◆行動の観察（グループの活動）

次／時間	学習活動	言語活動における指導上の留意点	◇評価規準 ◆評価方法 ＊努力を要する状況と評価した生徒への支援の手だて
第2次 (4時間)	③グループ内で季語分析に取り組む。 ④季語・説明文を修正する。	③季節が感じられるか、五感が喚起されるかを確かめ、お互いに疑問や意見を交流させる。 ④個人で考える時間を設け、季語分析を基に、つくった季語についてもう一度考えさせる。	＊進まない班には助言する。 ◆記述の分析 ◇主体的に学習に取り組む態度 ◆記述の分析（ワークシート） ◆行動の観察（グループの活動）
	⑤修正点をグループで発表し合う。 ⑥グループでよかった季語を一つ全体で発表する。 ⑦「よい」季語についての感想を書く。 ⑧なぜ「よい」のかについて話し合う。	⑤修正したポイントをグループ内で説明させる。 ⑥理由も考えさせ、板書する。 ⑦話し合いや黒板のクラス発表の内容から考えさせる。 ⑧「よい季語に共通していることは何か」など、抽象化を促す声かけをする。	
	⑨話し合った内容を発表する。 ⑩共通点、類似点、相違点を考える。 ⑪俳句はなぜ季語を入れるのか考える。 ⑫まとめを書く。	⑨A3用紙にまとめさせ、発表後黒板に貼らせる。 ⑩黒板を見てグループで考えさせ、指名し、クラスで共有させる。 ⑪「よい季語はなぜよいのか」、その答えを発展させる。 ⑫言葉に対する見方について、気付いたことなどを記述させる。	

5 学習活動の実際

季語を自作するためのアイデアを出し合うために、マッピングをしたが、実際にはマッピングよりもグループで話し合うことによって着想を得ていた（資料1）。季語分析（資料2）から学ぶことが多く、言葉をみる観点が明確に与えられ、言葉に対する理解を深めることができた。「よい」季語は具体的に何が「よい」のか共通点を探ることで、言葉に対して多くの気づきを得ることができた。

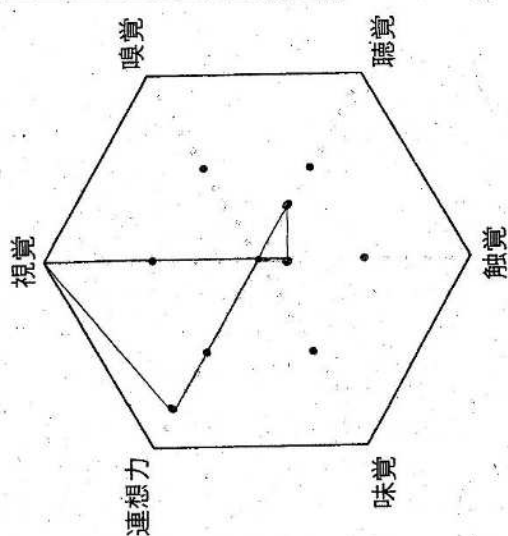
6 研究の成果と課題

「言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解すること」については課題が残った。「思考・判断・表現（読む能力）」の評価をしてみると、評価Aに到達した生徒がいなかった。いかに季語が継承されているかということに気付かせたかったのだが、もう少し時間軸を意識させるような問いかけができればよかった。「主体的に学習に取り組む態度」を評価するために、振り返りシート（資

料3)を使用した。振り返りからは授業内の学びや反省を読み取ることはできたものの、まとめの記述と補完し合いながらの評価が必要だと考えた。

季語分析をしよう！

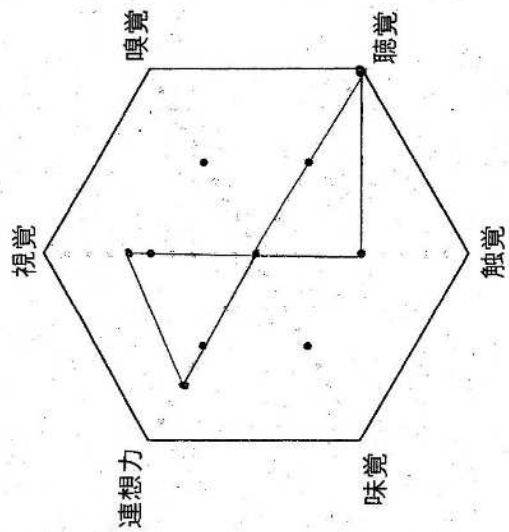
一年()組()番 氏名()
 (自分) (さん) さんの季語
 暖菜 季節(秋)



〈分かったこと、良かったこと〉

「暖」という言葉と「菜」のイメージが、
 班の人が書いていた視覚の暖かさと、
 食卓の暖かさをイメージして、
 得がきて、ためになつた。

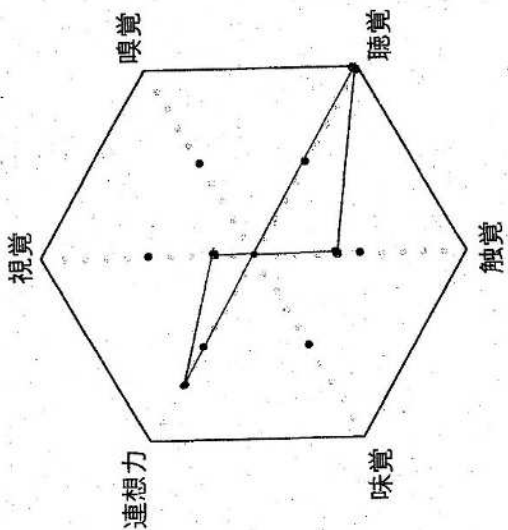
() (さん) さんの季語
 枯れ葉者 季節(秋)



〈分かったこと、良かったこと〉

足元に視点を置いて、音や季節を感じるとい
 うのがおもしろいと思った。
 秋といえば紅葉を連想し、
 枯れ葉に焦点をのけたイメージで、
 思った。

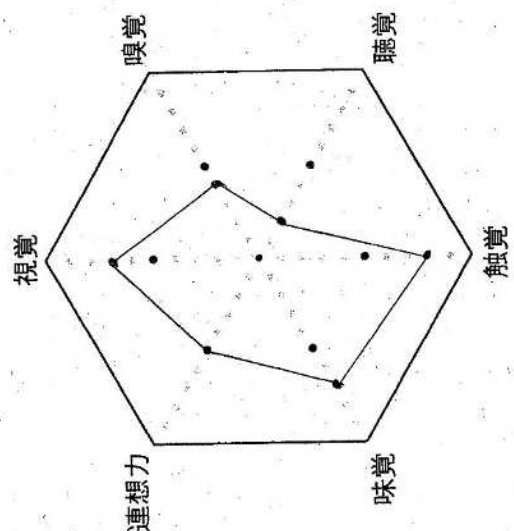
() (さん) (くん) の季語
 虫の音 季節(秋)



〈分かったこと、良かったこと〉

様々な虫の音が、
 秋のイメージと、
 説明で、
 虫の音というイメージを、
 感じた。

() (さん) (くん) の季語
 ぼくぼく 季節(秋)



〈分かったこと、良かったこと〉

「食」のイメージと、
 季節のイメージと、
 説明で、
 秋のイメージを、
 感じた。

<授業実践3>「俳句に親しもう」(言語文化 第1学年 2学期)

1 実践にいたる背景

共通必修科目「言語文化」は、先人の築いた伝統と文化への理解を深め、社会人として生涯にわたって生活するために必要な国語の資質・能力の基礎を確実に身に付けることをねらいとする科目である。

〔知識及び技能〕においては「言葉の特徴や使い方に関する事項」「我が国の言語文化に関する事項」の2事項を、〔思考力、判断力、表現力等〕においては、「書くこと」「読むこと」の2領域を扱う。

また、「言語文化」履修後の選択科目である「文学国語」では、「言語文化」で身に付けた資質・能力を活用し、発展的な内容を扱う。特に「書くこと」の領域では、指導事項ウ「読み手を引き付ける独創的な文章になるよう工夫すること」、指導事項エ「読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること」とあり、読者の視点から筆者の視点への移行を促していると捉えることができる。

「言語文化」においては、我が国の言語文化を継承する担い手として、先人の築いた伝統と文化を尊重し、幅広い知識や教養を活用しなければならない。〔思考力、判断力、表現力等〕において、表現力の育成を目指すため、和歌や俳句などの詩歌の表現・技法に注目し、それを実際に使った文章を書かせることでその効果について理解することができるのではないかと考えた。また、古典と生徒自身の身近な体験を結び付けさせることにより、いっそう古典に親しみやすくなるのではないかと考え、本単元では「言語文化」の「書くこと」の指導事項(1)イに主眼を置き、実体験や思いを効果的に相手に伝えるための語句選択、描写について書かせることとした。

2 指導目標

(1) 単元の目標(下線部: 関連する学習指導要領の指導事項)

・本歌取りや見立てなどの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解すること。

(〔知識及び技能〕(1)オ)

・自分の体験や思いが効果的に伝わるよう、文章の種類、構成、展開や、文体、描写、語句などの表現の仕方を工夫すること。(〔思考力、判断力、表現力等〕A書くこと(1)イ)

(2) 言語活動

ア 言語活動

本歌取りや折句など用いて、感じたことや発見したことを短歌や俳句で表したり、伝統行事や風物詩などの文化に関する題材を選んで、随筆などを書いたりする活動。(〔思考力、判断力、表現力等〕A「書くこと」(2)ア)

イ 言語活動のねらい

自分の知識や体験として蓄積してきたものから、言語文化の特質に関わりの深いものを選ばせる必要がある。特に、四季の変化はもちろんのこと、自身が体験したものを題材として選択することで、適切な表現を探し求める試行錯誤が活発になると考えられる。

また、伝えたいことを箇条書きするなど、視覚化することで、表現したいことがより明確になることに気付かせたい。

(3) 教材

ア 教材

松尾芭蕉『笈の小文』(小学館新編日本古典文学全集『松尾芭蕉集』) ※『あいち文学散歩』所収

イ 教材観

本教材は俳諧紀行文であり、松尾芭蕉が実際に体験したことを基に俳句を詠んでいるものである。

特に今回扱う部分は地元愛知県を舞台としたものであり、生徒も関心をもちやすい部分である。また、俳句の表現として、心中語を用いない句と心中語を含む句が出てくるが、そこに込められた思い自体は表出されていないので、生徒にも余韻を含ませる俳句を詠ませたい。

(4) 主体的・対話的で深い学びの工夫

自らの人生において体験した喜怒哀楽の出来事を題材とすることで、古典に対する忌避感を薄れさせたい。また、17音の中に自分の思いを表現するためには、一つ一つの言葉を慎重に吟味する必要があるため、表現に対する意識の向上を目指した。

3 評価

(1) 単元の具体的な評価規準

知識・技能	思考・判断・表現（書く能力）	主体的に学習に取り組む態度
本歌取りや見立てなどの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解している。	「書くこと」において、自分の体験や思いが効果的に伝わるよう、文章の種類、構成、展開や、文体、描写、語句などの表現の仕方を工夫している。	積極的に自分の体験した出来事から印象的なものを探し出し、学習の見通しをもって、自分の思いを効果的に表現できるように言葉の選択をしながら俳句をつくらうとしている。

(2) 評価方法

ア 知識・技能

ワークシートの俳句

イ 思考・判断・表現（書く能力）

	評価A	評価B	評価C
自分の体験や思いが効果的に伝わるよう、俳句の表現の仕方を工夫している。	俳句が自らの体験に基づきつくられており、言語表現の他に余韻として感情が表現されている。	俳句が自らの体験に基づきつくられており、俳句内に感情語が含まれている。	俳句が自らの体験に基づきつくられている。

ウ 主体的に学習に取り組む態度

	評価A	評価B	評価C
積極的に自分の体験した出来事から印象的なものを探し出し、学習の見通しをもって、自分の思いを表現できるように言葉の選択をし	積極的に実体験の中から自分の思いを俳句として効果的に表現しようとしている。	積極的に実体験の中から自分の思いを俳句として表現しようとしている。	実体験の中から自分の思いを俳句として表現しようとしている。

ながら俳句をつくろう としている。			
----------------------	--	--	--

4 単元の指導計画（配当 2 時間）

次／ 時間	学習活動	言語活動における指導上の留意点	◇評価規準 ◆評価方法 ＊努力を要する状況と評価した生徒への支援の手だて
第1次 （1時間）	①松尾芭蕉についての文学史上の知識を得る。 ②蕉風の文学を理解する用語の知識を得る。 ③『笈の小文』本文、「鳴海にとまりて」～「鷹一つ見付けてうれしいらご崎」までの読み方や単語の意味を確認する。 ④内容を把握する。 ⑤自分の体験したことの俳句をつくる。	①教科書や国語便覧を使い，松尾芭蕉の生涯や文学史上の位置付けを確認させる。 ②範読し，指名読みさせる。 ③助動詞の意味を確認させる。 ④俳句の基礎知識（季語など）を確認させる。	◇知識・技能 ◆記述の点検 （ノート）
第2次 （1時間）	①前時までに作成した俳句を推敲する。 ②他者の俳句を評価して，下の句をつくる。	①自分の俳句をつくるに当たり，完成までの経緯を残させる。 ②俳句作成後，どのような感情が含まれているのかを基にして，他者の俳句に七七を付けさせる。	◇思考・判断・表現 ◆発言・行動の観察 （ワークシート）

5 学習活動の実際

実際の活動として，生徒自身は，自身の体験と合致する季語選びや，心中語を使わずに表現するための言葉選びに苦勞をしていたように見受けられる。しかし，推敲をすることを通して，言葉自体のもつイメージに気付き，よりよい言葉を選ぼうとしていた。

また，七七の下の句を付ける段では，俳句をつくるよりも難しいという声も聞こえた。「言語文化」よりも「文学国語」がより高度であることを示していると言える。

実質，第1次と第2次の間の宿題とした部分もあるので，3時間ほどかけた授業実践となった。

6 研究の成果と課題

「言語文化」の科目は，実際に「書くこと」を通して，〔知識及び技能〕の「言葉の特徴や使い方に関

する事項」にも強く影響を与えていることが分かる。今後、評価については、より観点を明確にしたものが求められることが考えられるので、授業自体も明確な目標をもって構築していかなければならないと感じる。

俳句をつくろまい！！

年 組 番 氏 名

1 今までに自分が体験したことの中で、印象に残っている感情（恋愛・怒ったこと・嬉しかったことなど）を挙げよう！

例 高校の秋・失恋して つらい	
例 冬・鹿児島への旅行 が 楽しかった	

2 1の中から一つ選び、その題材にふさわしいイメージの季語を考えよまい。

1	2	3

3 2の中から一つ選んで俳句をつくろまい！（消しゴムを使わない！！）

最初	上 の 句	中 の 句	下 の 句
推敲			
完成			

4 右の完成した俳句に、下の句（七七）を付けよまい！

出席番号	

5 ルーブリック

	評価の観点	A	B	C
知識・技能	季語を使って俳句をつくり、感情を表現しているか。	季語を用いており、自分の思いを感情語を用いず表現している。	季語を用いており、感情語を用いて表現している。	感情語だけの表現になっている。
思考・判断・表現	自分の体験や思いが効果的に伝わるよう、俳句の表現の仕方を工夫している。	俳句が自らの体験に基づきつくられており、言語表現の他に余韻として感情が表現されている。	俳句が自らの体験に基づきつくられており、俳句内に感情が含まれている。	俳句が自らの体験に基づきつくられている。
主体的に学習に取り組む態度	積極的に自分の体験した出来事から印象的なものを探し出し、自分の思いを表現できるように言葉の選択をしながら俳句をつくろうとしている。	積極的に実体験の中から自分の思いを俳句として効果的に表現しようとしている。	積極的に実体験の中から自分の思いを俳句として表現しようとしている。	実体験の中から自分の思いを俳句として表現しようとしている。

俳句から感情は伝わった？	1 3 5 _____
体験に即した感情だった？	1 3 5 _____
感情に即した季語だった？	1 3 5 _____
よい俳句？	1 3 5 _____
上の項目にないけれど、よかった所！！	
• • •	

＜授業実践4＞「描写を工夫して小説を書こう」（文学国語 第2学年 2学期）

1 実践にいたる背景

学習指導要領の改訂に伴い、選択科目「文学国語」が設定される。本実践では、共通必修科目「言語文化」との違いに焦点を当て、「文学国語」における「書くこと」の指導の一例を示す。

「書くこと」の指導事項として、「言語文化」では「自分の体験や思い」に基づいて書くことを挙げているが、「文学国語」では「読み手の関心が得られるよう、文章の構成や展開を工夫すること」や「文体の特徴や修辞の働きなどを考慮して、読み手を引き付ける独創的な文章になるよう工夫すること」など、「読み手」を意識して創作することを挙げている。創作において表現を工夫することは、表現を読み味わう観点に結び付き、文学的な文章の理解を深めることにつながる。そこで今回は、「言語文化」の発展として、「読み手」を意識して「創造的」な文章を書く単元で授業を実践した。

2 指導目標

(1) 単元の目標（下線部：関連する学習指導要領の指導事項）

・情景の豊かさや心情の機微を表す語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。（〔知識及び技能〕(1)イ）

・文体の特徴や修辞の働きなどを考慮して、読み手を引き付ける独創的な文章になるよう工夫すること。（〔思考力、判断力、表現力等〕A書くこと(1)ウ）

(2) 言語活動

ア 言語活動

自由に発想したり評論を参考にしたりして、小説や詩歌などを創作し、批評し合う活動。（A書くこと(2)ア）

イ 言語活動のねらい

小説の創作において、主に情景・行動描写を工夫させる。他者の提案を受けた上で、最も効果的な表現を選択させることにより、一つの場面にもさまざまな表現の可能性がある、表現の工夫によって読み手を引き付ける独創的な文章となることを実感させたい。

(3) 教材

ア 教材（出典）

諏訪哲史「市民薄暮」（諏訪哲史『領土』2011 新潮社）※『あいち文学散歩』所収

イ 教材観

「市民薄暮」は、青年である「わたし」の前に、母親が16歳の女生徒として現れ、「一宮七夕祭り」に誘い合う場面を描いている。本単元ではこの構造を用い、「わたし」が時空を超えて「ある人」と出会い、その意外な一面を知る物語を創作させる。

(4) 主体的・対話的で深い学びの工夫

登場人物「ある人」を個々に選定し取材することにより、生徒の創作意欲を高めたい。また、既習の小説を参考にしたり、グループカンファレンスで他者の語感・語彙に触れながら協働で表現を工夫したりすることによって、読み手を引き付ける独創的な文章を工夫させたい。これらの学習活動を通して、主に「読むこと」として学習してきた文学的な文章を「書くこと」の視点で捉え直させ、両者を関連付けた深い学びへと導きたい。

3 評価

(1) 単元の具体的な評価規準

知識・技能	思考・判断・表現（書く能力）	主体的に学習に取り組む態度
情景や心情を適切な語句や表現を用いて表し、その効果を考えることを通して、語感を磨き、語彙を豊かにしている。	書くことにおいて、読み手を引き付ける独創的な文章になるよう工夫している。	読み手を引き付ける独創的な文章になるよう粘り強く工夫し、読むことでの学びを生かして、小説を創作している。

(2) 評価方法

ア 知識・技能

創作小説最終稿において、情景や心情を表す語句や表現を、適切に語感を意識して用いているかを、「ワークシート4」の描写文を用いて評価する。

イ 思考・判断・表現（書く能力）

創作小説最終稿の「最も工夫した描写部分」において、表現意図をもって表現を工夫しているかを、「ワークシート4」の修正箇所と「ワークシート8」の表現意図の説明を用いて評価する。

	評価A	評価B	評価C
小説における描写の効果を考え表現意図をもって表現を工夫している。	小説における描写の効果を考え、表現意図をもって表現を工夫している。	小説における描写の効果を考え、表現している。	小説において描写文を用いて表現しようとしている。

ウ 主体的に学習に取り組む態度

単元の概要を理解して自己の目標を立て、目標や学習の仕方を調整し続けながら、粘り強く学習に取り組むことができたかを、「目標&振り返りシート」と各ワークシートの記述を用いて評価する。

	評価A	評価B	評価C
自己の目標や学習の仕方を調整し続けながら、粘り強く学習に取り組んでいる。	自己の目標や学習の仕方を調整し続けながら、粘り強く学習に取り組むことができている。	自己の目標や学習の仕方を調整し続けながら、学習に取り組むことができている。	自己の目標や学習の仕方を調整しようとしている。

4 単元の指導計画（配当6時間）

次／時間	学習活動	言語活動における指導上の留意点	◇評価規準 ◆評価方法 ＊努力を要する状況と評価した生徒への支援の手だて
第1次（1時間）	①単元目標を知り、個別目標を立てる。 ②「市民薄暮」を参考に「ある人」と時空を超えて出会い、その人の意外な一面を知る小説を書く。	①「知識及び技能」「書くこと」の個別目標を立てさせる。 ②全体を構想した上で小説を書かせる。 ・事前に「ある人」を選定し取材させておく。	◇主体的に学習に取り組む態度 ◆行動の観察、記述の確認（「目標&振り返りシート」） ＊個別目標の例文を示す。 ＊個別に助言し、構想を明確にさせる。

次／時間	学習活動	言語活動における指導上の留意点	◇評価規準 ◆評価方法 ＊努力を要する状況と評価した生徒への支援の手だて
第2次（2時間）	①地の文の種類を確認し小説の地の文を分類する。 ②個別目標を見直す。 ③4人でグループカンファレンスを行い、描写を提案し合う。	①「羅生門」を用いて情景・行動描写の効果を確認させる。 ②地の文を分析し、自己の表現上の課題を発見させる。 ③特に心情を描きたい場面について、イメージマップを作成し、場面を具体化させる。	◇知識・技能、主体的に学習に取り組む態度 ◆行動の観察、記述の確認 （「目標&振り返りシート」・「ワークシート4」） ＊表現したい心情を「ワークシート3」で確認させる。
第3次（3時間）	①表現を修正して作品を完成させる。 ②工夫した描写部分の表現意図を記述する。 ③単元全体の振り返りをする。	①表現意図にふさわしい表現を選択させる。 ②最終稿の表現がふさわしいと考えた理由を記述させる。 ③本単元での到達点と今後の目標を記述させる。	◇知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度 ◆行動の観察、記述の確認 （「目標&振り返りシート」・「ワークシート4・8」）

5 学習活動の実際

「市民薄暮」を参考とし、創作小説の枠組みを示したことで、時空を超えた小説を構想させることができた。また、題材を取材させることにより、創作意欲を高めることができた。

創作小説の課題を地の文に限定し、「説明」「行動描写」「人物描写」「情景描写」「心理描写」に分類することによって、自己の表現上の課題を確認させることができた。その後、グループカンファレンスで改善案について話し合い、表現を工夫させた（写真1）。このことにより、読み手の目線で自分の作品を見直し、表現を修正させることができた。



【写真1 グループカンファレンスの様子】

6 研究の成果と課題

生徒の小説の捉え方に変化が見られた。「自分で書いてみると、作者が、何をどんな気持ちを込めて書いているのか、分かったような気がする」という感想には、作者側の視点を獲得する契機となったことがうかがえる。また、取材した人物について「今まで考えたこともなかったことを考えた」という感想が多かった。取材に基づく創作が「心の機微を描き、日常の世界を見つめ直す」機会となり、「文学国語」の目指す「感性・情緒の側面の力」の育成につながったと考えられる。

一方で、情景描写の多くは天候に終始し、平易な表現が多く、描写を比喩と混同している生徒もいた。「語感を磨き、語彙を豊かに」する手だてとして、語彙集を提示したり、描写の工夫を段階別に示したりする必要がある。さらに、構成や展開、視点なども工夫して創作を重ねると、「独創的で文学的な文章を創作する」という「文学国語」の「書くこと」の目標を達成できるのではないかと考える。

【参考文献】ナンシー・アトウェル著『イン・ザ・ミドル ナンシー・アトウェルの教室』2018 三省堂

目標＆振り返りシート

組 番氏名

単元 目標	知識・技能	思考・判断・表現（書く能力）
ひとつの事柄を表現するのに、複数の候補を考え、最も効果的な表現を選ぶことができる。	その場面の気候や起こったこと、登場人物の行動などを濃くと書かずに工夫して書く。	「ある人」や「わたし」の心情を、心情語を用いずに、描写文によって伝えることができる。
各自の 目標	その場面の気候や起こったこと、登場人物の行動などを濃くと書かずに工夫して書く。	お母さんへの心情を語らずに伝わるようには描写文を書く。
中間 振り返り	説明文と行動描写が多いかた。	心情をそのまま書いてしまっている文があった。
目標の 見直し	どんな場面どんな行動がどんな心情をうんだかが伝わるように	母の話を聞いたとき自分の心を植ゆけはき物、景色などを書く。
評価	◎ ○ △	◎ ○ △
できる ように なった こと	一番良い表現を見つけるために小説などを見たり、ある場面を語らずに濃くと書かずに工夫して、決山言葉の意味や正しい使い方を知れた。	登場人物の心情や物事を濃くと書いたりして、文を情景が行動描写で表せるようになった。
今後 身に つけた こと	少し難しい言葉を使い、色んな表現を知り、使っていること、単語を知り、使っていること。	次書く機会があれば、最初から描写を考えて書いてみたいと思った。

描写を工夫して小説を書こう 2 組 番氏名

★「ある人」を選定し、取材・情報収集をしよう

質問例

- ・どんな人（例：高校生）でしたか。
- ・どんな夢を持っていましたか。夢を実現するために何をしていましたか。
- ・悩みやコンプレックスはありましたか。それをどのように克服しましたか。
- ・大きな決断をしたことがありますか。人生の転機となったことはありますか。

人物名	年齢	当時の年	歳頃	所属（学校等）	好き・得意なこと 夢中だったこと	嫌い・苦手なこと 避けていたこと	悩み コンプレックス	夢 あこがれ	決断したこと 転機	当時のエピソード

描写を工夫して小説を書こう 3 組 番氏名

★創作小説を構想しよう

「わたし」が「ある人」と時空を超えて出会う、

その人の意外な一面を知る。物語

（誰と お母さん） （いつ 中学校より）

（どこで 帰り道・家） （出会い、

その人の意外な一面（何を いじめるか）に / 家庭の複雑さを知る物語

★細かな設定を考えよう

名	「ある人」人物	設定年齢	歳頃	所属（学校等）	場面（季節・時間） 場の雰囲気	★「ある人」が 思っていること 考えていること	そこから見える 「意外な一面」	★それを知った 「わたし」の心情
	母		13	中学校	秋 夜	自分から我慢したいといえない 自分より弱い。	辛い過去、強さ	本当は強い 今の母への感謝

描写を工夫して小説を書こう5 組 番氏名
★グループ・カンファランスを行い、「行動描写」「情景描写」を工夫しよう

＜四人グループで、四人全員の作品について、それぞれ行う＞

① 作品の地の文を「説明」「行動描写」「人物描写」「情景描写」「心理描写」に分類し、○の記号を文頭右側にメモする。

地の文の種類			
説明	人物描写	情景描写	行動描写
この二、三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉とかいう災いが続いて起こった。そこで洛中のさびれ方はひととおりではない。 (羅生門)	英夫君は火鉢に手をかざした。右の指には針だてがいくつもできている。 (ナイン)	彼女と別れた後、ぼくはひとり歩き出した。 見上げると黒い雲がたちこめていた。 彼女と別れた後、ぼくはひとり歩き出した。 見上げると雨上がりの空に虹がかかっていた。 (NHK 高校講座 ベーシック国語 第38回小説の読解)	下人は、やもりのように足音をぬすんで、やつと急なはしごを、いちばん上の段まではうようにして上りつめた。 その髪の毛が一本ずつ抜けるのにしたがって、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えていった。 (羅生門)

※ワークシート1（「市民権」、7・8（羅生門）も参考にしよう。

② 心情を描きたい場面や人物の様子を作者に質問し、具体的にイメージする。
※ワークシート6を活用しよう。

③ 挿入する「行動描写」「情景描写」を提案する。

※文を考えて、作者の「ワークシート4」下段に書くか、フセンで貼る。

※「説明」「会話文」「心理描写」は必要最低限とし、「情景描写」「行動描写」に置き換えたり、削除を提案したりする。

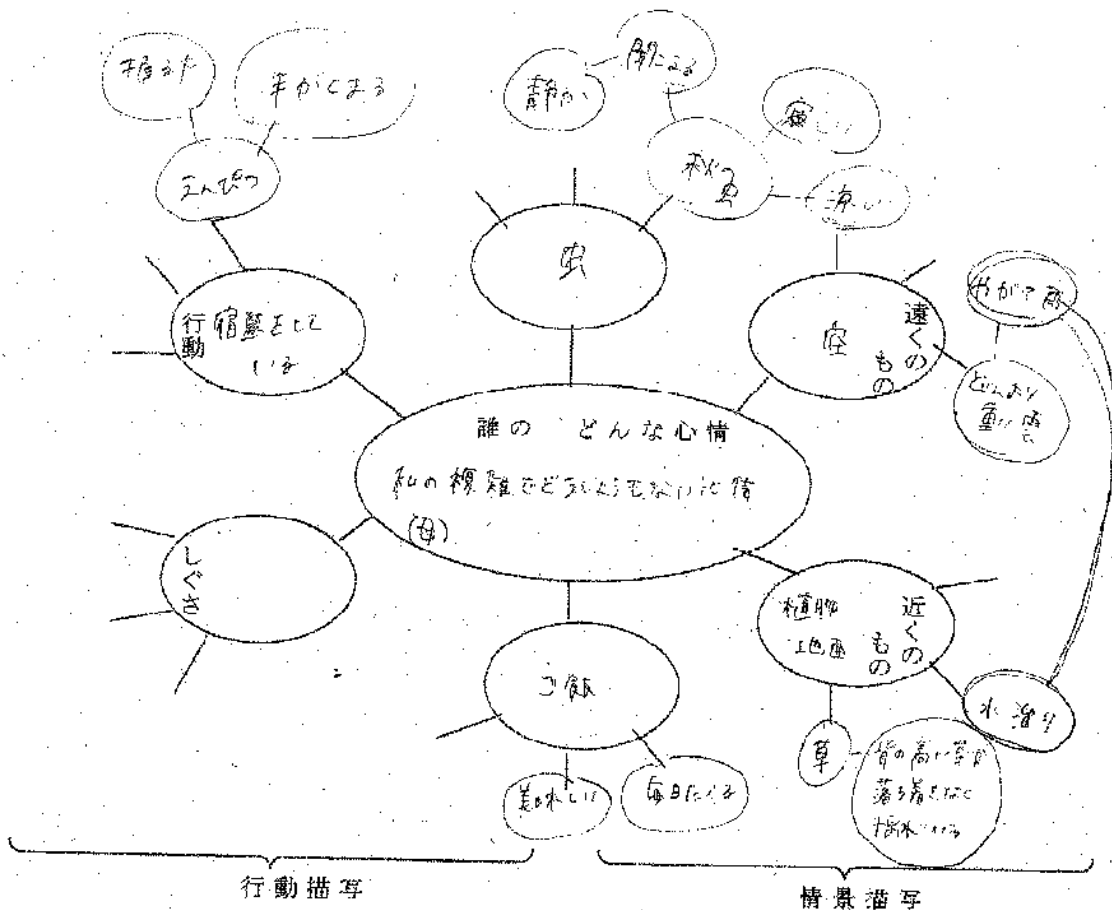
★ポイント！

「行動描写」「情景描写」によって、場面と心理がつながり、表現に奥行きが出る。登場人物の心情を感じ取れるような描写文を考え、提案しよう。

＜個人で行う＞

④ グループカンファランスでの提案をふまえて、作品に用いる表現を検討し、作品を完成させる。

※行間に書き込むか、記号や番号をつけて、順序が分かるように示せばよい。

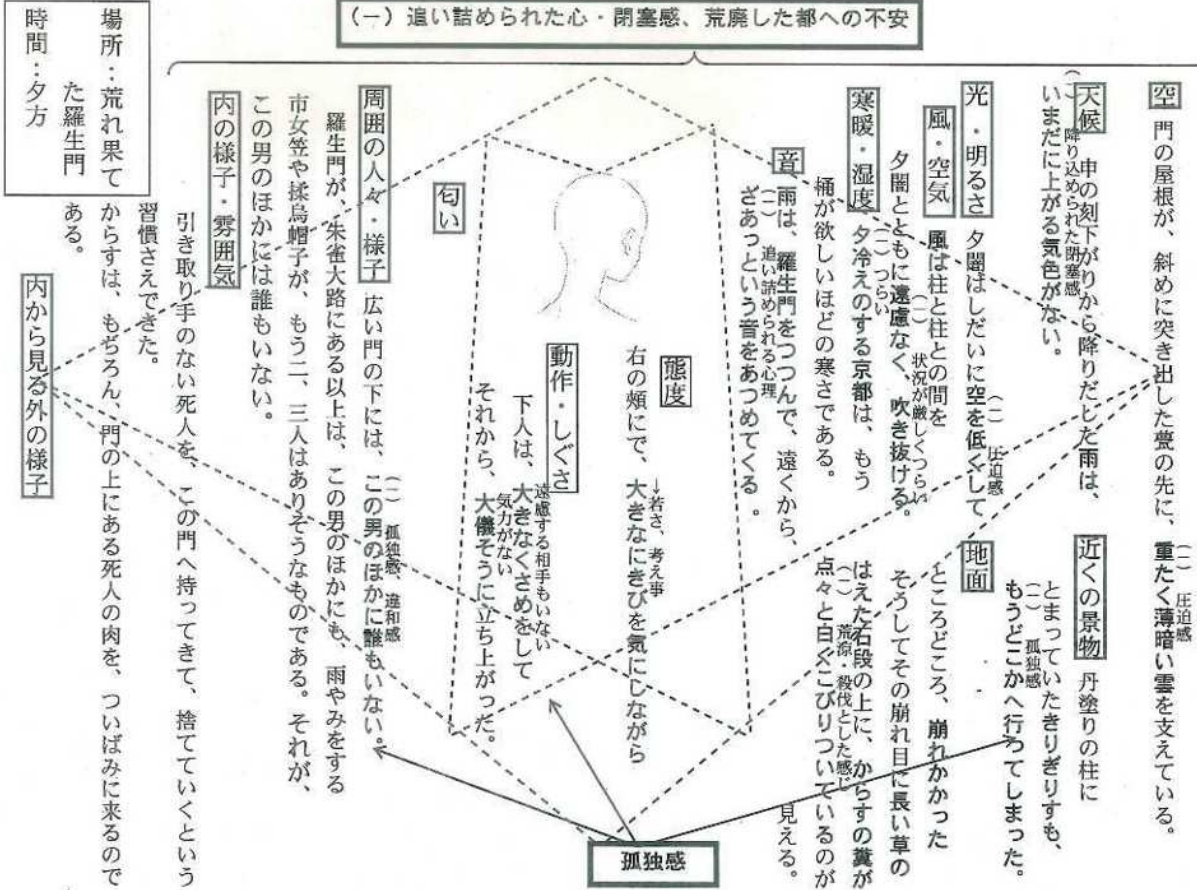


描写を工夫して小説を書こう6(改) 一組 番氏名
★登場人物の心情からイメージマップを作り、「情景描写」「行動描写」を考えてみよう

描写を工夫して小説を書こう7
★芥川龍之介「羅生門」の情景描写

組 番氏名
行動描写では、下人の心理が描かれていた！

(一) 追い詰められた心・閉塞感、荒廃した都への不安



描写を工夫して小説を書こう8 一組 番氏名
★「工夫した描写部分の表現意図を説明しよう」
原稿(ワークシート4)の「工夫した描写部分」を赤で大きく囲うこと。

来りかくなったの調を覚えるのは、諦めたような声だった。

としていた部分を

少し間を空けてから、先程よりも強く握った鉛筆で、彼等は宿題を再開して言った。考えないうちに、自分に言い聞かせようという口調で。

に改めた。

その理由

最終稿の表現がふさわしいと考えた理由を説明しよう。
(グループカンファランスの意見・提案についても説明すること。)

母の行状を諦めたような声だった。ただ、表現したので、行動描写をいれたいという意見があった。鉛筆を強く握るという行動描写の何かに我慢している母の心情が伝わると思った。今までの敬語だった母が、休む暇がないから、はなないわ。とタメやうになったことも、自分に言い聞かせるような口調でと補足すること、より自分を追い込むような母の性格が伝わると思ったため、最終的にこの表現にした。